

Part II

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ



インドネシア

ジャカルタに生きる＝雨

2013年、年明け早々、ジャカルタは深刻な洪水被害に見舞われ非常事態宣言が出されました。町の至るところが浸水し、停電が続きました。インフラが比較的整備されている中心部でも水が氾濫し、車も身動きがとれなくなりました。南部、川沿いのカリバタ地区ではとくに被害が大きく、かろうじて運び出した家財道具と路上生活をはじめの人々で、幹線道路の高架下は溢れかえっていました。たくさんの子どもの姿もあります。

インドネシアは常夏で、雨期と乾期が半年ごとに繰り返されます。ここ数年は温暖化の影響からか、乾期に入っても雨期並みの雷雨に襲われることが多くなりました。大都市ジャカルタにとって、いまだに下水道が整備されていないことは大変深刻な問題です。大雨の度に通行困難になり、かならず浸水被害を受ける地域があります。地形的に低い位置にある村など、丸ごと浸水してしまうところも。その都度メディアはこぞって取材に赴き、被災者の訴えをテレビで流します。大統領が視察に訪れ、住民を励ます姿も映ります。かといって国が援助や整備をしてくれるわけはありません。

これだけ経済成長が騒がれている現在でも、インド



1. 洪水で分断された東ジャカルタのメラウ地区。幹線道路にはボートで行き来する人の姿も。停電を免れた高架橋の照明が遠くに光っている。**2.** ジャカルタ南部カリバタ地区には、大量のゴミが流れ着いた。**3.** カリバタ地区の幹線道路の高架下。運び出した家財道具と共に路上生活をはじめ被災者。たくさんの子どもたちも。



ネシアではインフラ対策や貧困層への支援が乏しく、多くの場合、経済力の差が人の生死を決めてしまいます。富裕層には医療が優遇されますが、貧困層の命は運と生命力次第です。もちろん、子どもたちの養育や健康維持も各家庭の経済事情によって大きく左右されます。とくに貧困層の子どもたちは、知らず知らずの間に健康を冒されています。一般に、分別やりサイクルに対する国民の意識が低く、ゴミのポイ捨ては当たり前。何でもかんでも一緒に捨て、軒先で焚火にすることもあります。ポイ捨てによって町中がゴミだらけです。雨天時にはドブや川があらゆる種類のゴミで氾濫してしまいます。公害で汚染された雨水と一緒に流れ込んでくる汚水に、子どもたちは裸足で浸かります。その水で泳ぎ、遊びます。止める大人はまずいません。それが人体におよぼす影響を理解していたとしても、どうすることもできません。

憲法で人権を保障し、町を機能させるためには、国のインフラ整備が先決です。子どもが健康に育つ権利。当たり前に感じられることが、ここでは置き去りにされています。貧民街では、自己責任で家の前の土を掘り起こし、パイプを埋め、近くの川までつなげるなど、住人自らが下水道を通すこともあります。川に垂れ流される下水は最良の方法とは言えませんが、その土地なりに最善を尽くすしかありません。近所付き合いと近隣住人との助け合いが何よりも大切です。

南ジャカルタの閑静な住宅街にあるサッカー練習場では、大雨のなか、富裕層の子どもたちがお揃いのユニフォームでチーム練習に参加していました。色とりどりのスニーカーが、雨に濡れて輝いています。保護者はつきっきりで見守ります。

市の中心部にあるベゲウェック村は、あたり一体がお墓です。各国大使館が立ち並ぶ高級住宅街の裏手にあたるこの地域では、イスラム教、キリスト教、仏教など、あらゆる宗教のお墓が一面に広がっています。墓地に入る小道を奥に進むと、墓守とゴミ収集で生計を立てる人々が、ひっそりと暮らしています。大雨となったこの日も、村の子どもたちはお墓の間をいつまでも走り回っていました。



©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ
フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。現在ドキュメンタリー映画を制作中。



4



6



5

4. ジャカルタ中部ベゲウェック村。大雨が降る直前、墓石の上を走り回る子どもたち。空には無数の鳥が舞っていた。5. 大雨のなか、墓石の前で遊ぶベゲウェック村の少女たち。6. 雨のなか、サッカーチームの練習に参加する富裕層の子どもたち。保護者はつきっきりで見守る。南ジャカルタ。